

# エコツーリズムと地域振興

森 信 之

## I はじめに

エコツーリズムを対象とする研究においては、マス・ツーリズムがもたらす環境へのインパクトに対し、自然環境保護を重視するツーリズムの一形態としてエコツーリズムをとらえる場合が多い<sup>1)</sup>。その背景には、環境保全への関心の高まり、観光ニーズの多様化の中で、エコツーリズムが世界的に注目され、エコツーリズム、あるいは、エコツアーと称される観光形態が増大してきたことがあり、そこから、エコツーリズムが、固有の特性をもったツーリズムの一形態として認識できるものである、あるいは、認識すべきものであるという前提に基づき、エコツーリズムの定義に関する議論が展開してきた。

他方、エコツーリズムがもたらす自然環境保護への貢献、あるいは、経済的利益といった効果に着目し、エコツーリズムの価値を積極的に認めることにより、エコツーリズムを普及させ、ツーリズムとして成長させるための課題、方策を追求する立場がある (Lindberg, K. and Enriquez, J. (1994), Eagles, P. F. J. and Higgins, B. R. (1998))。これについては、第一に、産業としてのエコツーリズムを定着させ、成長させようとするビジネスを視点とする議論、第二に、エコツーリズムを展開させることにより、自然環境保護を促す、あるいは、ツーリストの入り込みを増加させることにより、主として経済的利益の増大による地域振興を促すという地域を視点とする議論がある。エコツーリズムの効果を考える場合、国、特定の地域等様々な地理的スケールがあり得るが、それらには、エコツーリズムが行われる場としての自然保護区域 (国立公園や自然保護区等、環境保全のために開発等が制度的に規制された区域、あるいは、環境

管理が行われる区域)、保護すべき環境を有する中山間地域、島嶼部、また、エコツーリズムを経済的基盤とする国や地域がある。

さらに、ツーリズムという枠内にとどまらず、エコツーリズムに関わる地域開発全般を視野に入れ、国や地域にとっての地域開発の社会経済的な意義や矛盾に関する議論、また、制度的・技術的側面を含めた、ツーリズムとしてのあり方を問う計画論的な議論がある。

エコツーリズムについては、既往研究において、以上のような様々な論点をめぐって議論されている<sup>2)</sup>。本稿は、そうしたエコツーリズムに関する既往研究の成果をふまえ、フレームワーク設定や実践面への適用という点で言及されることが比較的少なかった地域振興<sup>3)</sup>という視点に基づき、理念、ツーリズムとしてのあり方からより実践的側面を含めた課題に 대응するため、エコツーリズムの特性に関する検討をふまえた上で、地域振興との関わりについての考え方を示すとともに、地域振興におけるエコツーリズムの効果、エコツーリズム展開の方向性を示すことを目的としている。

そのため、以下では、まず、地域振興に視点を据えて、エコツーリズムに関する既往研究のレビューを行い、エコツーリズムの特性について検討を行う。次いで、エコツーリズムと地域振興との関わりについて、地域特性と地域資源との関係から考え方を示す。それをふまえて、事例を基にしながら、地域振興におけるエコツーリズムの効果、展開の方向性について、自然保護活動や広域ツーリズムとの関連を重視して検討を進める。

## II エコツーリズムの特性

### 1. エコツーリズムの目標及び形態

エコツーリズムについては、国内外において、すでに

いくつかの定義が示され、議論されている。そこで重要な点は、示された定義が、エコツーリズムのいかなる局面を対象とし、エコツーリズムによって何を実現しようとするのかを明確に見据える必要があることである。

それは、地域振興との関連でエコツーリズムをとらえる場合、第一に、ツーリズム自体に関する議論の枠内にとどまらず、エコツーリズムが地域において生活、経済をはじめ多面的な関わりをもつこと、したがって、第二に、エコツーリズムが自然保護区域、希少自然資源をもつ地域において成立する形態であるという狭義の認識を越えて、地域にとってよりインパクトのあるツーリズムの形態であることに、積極的に価値を見出すことが重要であると考えられるからである。

以上をふまえ、既往研究において示された定義に関わる論点を取り上げ、エコツーリズムの目標及び形態の2点から検討することによって、定義のとらえ方、考え方を明確にする。

#### (1) エコツーリズムの目標

エコツーリズムの包括的な定義については、次項で述べるような他のツーリズム形態との差異に基づく議論よりも、エコツーリズムの目標との関連でとらえる方が有効と考えられる。それは、様々な利害が関わる地域振興において、エコツーリズムがそれらとどのような関連をもち、どのように位置づけられるのかがより明確になる

からである。

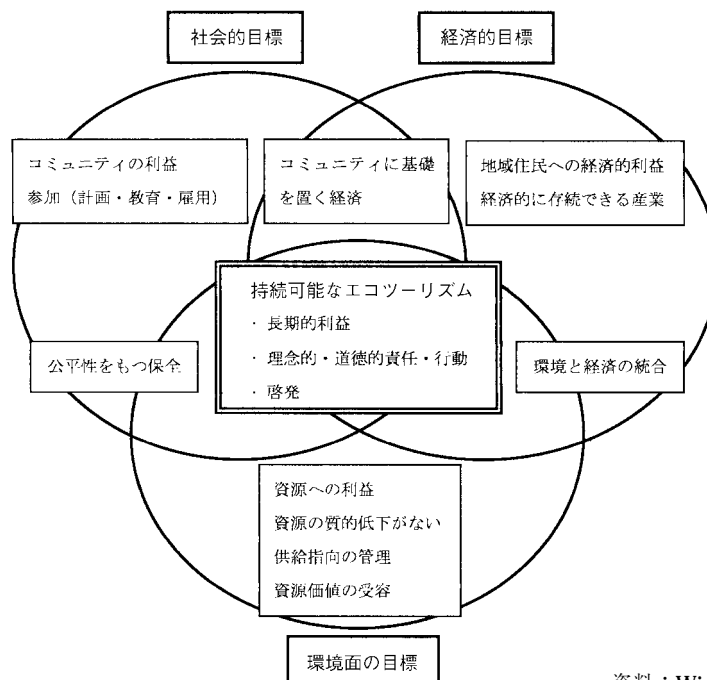
この点について、Sadler, B. の持続可能な発展システムのモデルを拡張した Wight, P. A. (1993) のモデルを基にすると、社会、経済、環境の3つの側面に関する目標が、持続可能性のために必要なバランスをもって達成される必要があると考えられる(第1図)。

Wight, P. A. (1993) は、このモデルの有効性について、エコツーリズムを展開する上で、3つの目標のバランスを崩す要素を明確にできる点、また、エコツーリズムの計画において、3つの目標のバランスがとれた価値指向のシステム及び政策のフレームワークを示すことができる点に求めている。さらに、こうしたフレームワークは、望ましい環境、社会、経済的条件づくり及びそれらがもたらす効果に重点を置いたエコツーリズム・マネジメントに組み込まれるべきであるとする。

こうしたモデルを念頭に置くと、エコツーリズムの目標と地域振興との関連において、次の3つの局面を指摘することができる。

第一は、持続可能性と密接に関係した、理念としてのエコツーリズムである。持続可能性についての議論は、マス・ツーリズムとオルタナティブ・ツーリズムとの関係<sup>4)</sup>、ツーリズムと環境との共生等との関連でとらえるべきであり、エコツーリズムに限定されるものではない。しかし、エコツーリズムを推進する上での理念、方向性は、持続可能性を先導するものとして位置づけら

第1図 持続可能なエコツーリズムの目標



資料：Wight, P. A. (1993)

れ、程度の差はあっても、他の形態のツーリズムの理念、方向性に対してインパクトを与えることが可能である<sup>5)</sup>。

第二は、エコツーリズムと地域づくりの目標との関係である。エコツーリズムの展開において、地域振興策や地域づくりに関わる様々な活動の目標との関わりが生じ、環境保全、環境と共生した地域振興といった点で、目標実現に相乗的な意義を認めることができる。

第三は、エコツーリズムの規範的な性格との関係である。エコツーリズムが、自然環境保護への積極的な貢献を重視する立場から、エコツーリズムの具体的な計画、それが基づく理念、エコツーリズム推進における様々なレベルのガイドラインといった局面で、エコツーリズム固有の規範的性格をもつものとなり、それが、エコツーリズムの推進主体、その活動、ないしは行動、それらに関わる制度、政策において、規制や管理といった具体的ななかたちで関わりが生じることとなる。

以上のようなエコツーリズムの目標との関連で、エコツーリズムの包括的な定義を見ると、①自然環境、文化的価値に依拠するツーリズムとしての定義、②自然環境保護、環境保全、教育、経済的利益といった点を含め、目的指向的な性格が強いツーリズムとしての定義、③自然環境保護、環境保全に着目した規範的な性格が強い定義、としてとらえることができる<sup>6)</sup>。

以上の3つのタイプの定義は、先に指摘したエコツーリズムの目標と地域振興との関連における3つの局面に概ね対応するものと考えられる。

その対応とは、①地域における自然環境、文化的価値に基づく理念としてのエコツーリズム、②環境、経済、文化といった地域の諸側面がバランスを保った地域づくりの目標、その実践としての意義をもったエコツーリズム

ム、③自然環境保護、環境保全のための具体的、実践的な意義、貢献を伴う規範的なエコツーリズム、であり、地域振興においては、それらが関連する各々の局面においてエコツーリズムを位置づけ、推進、展開することが可能となる。

(2) エコツーリズムの形態

ツーリズムの形態分類の中で、エコツーリズムをどのようにとらえるかについては、他のツーリズム形態との差異、あるいは、他のツーリズム形態との相互関係といった視点に基づく<sup>7)</sup>。

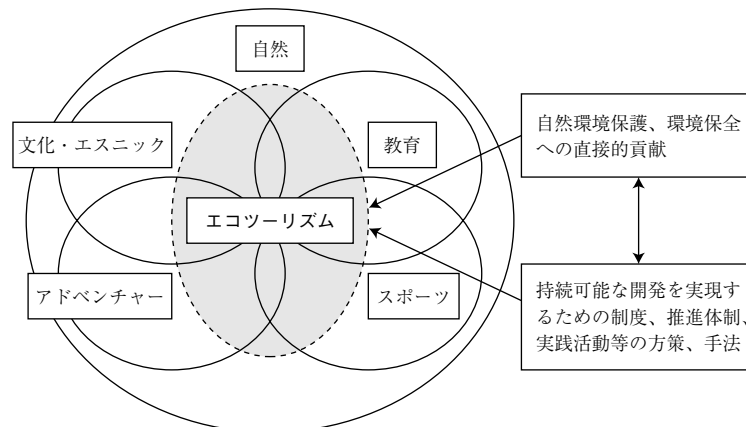
本稿では、厳密な形態分類だけを扱う意図はないが、既往研究をふまえると、エコツーリズムをツーリズムの一形態として認識しようとする場合、自然環境保護への直接的な貢献、環境保全のための制度、推進体制の存在といった点を強調する定義を用いる場合に最も明確になると考えられる。

そうした点について、ツーリズムの形態としてとらえたエコツーリズムの領域の面から示すと、自然に基礎を置き、文化・エスニック、アドベンチャー、教育、スポーツといった関連分野を横断的に包含するものとなり、さらに、自然環境保護、環境保全への直接的な貢献という側面、そのための制度、推進体制、実践活動といった持続可能性を実現するための具体的な方策、手法を保有する領域に、エコツーリズムが位置づけられる(第2図)。

以上のようなエコツーリズムの領域は、理念、目標、制度や組織といった局面において、より具体的ななかたちの条件や要素として示すことができる。

こうした点に関して、例えば、Wight, P. A. (1993) は、持続可能なエコツーリズムについて、①資源の質を

第2図 エコツーリズムの領域



低下させず、環境に優しいやり方で推進する、②直接参加による、あるいは、啓発を促すような経験ができる、③コミュニティ、行政、非政府組織、産業、ツーリストといったあらゆる主体に対して教育を行う（旅行前・旅行中・旅行後）、④あらゆる主体が資源固有の価値を認識することを促す、⑤資源それ自体を受け入れ、また、その限界を認識するものであり、それには供給側における資源管理を必要とする、⑥多くの活動主体間のパートナーシップを理解し、その形成を促す。活動主体には、行政、非政府組織、産業、科学者、地域住民を含む、⑦あらゆる活動主体に対して、自然、文化環境に関する理念的、道徳的な責任と行動を促す、⑧資源、コミュニティ、産業に対し、長期的な利益をもたらす（利益とは、保全であり、また、科学的、社会的、文化的、経済的利益である。）、⑨エコツーリズムにおける諸活動について、環境に対して責任ある活動が基づく理念が、ツーリストを誘引する外的な資源（自然、文化）に対してだけでなく、内的な活動に対しても適用されるようにする、の9点を指摘する。

他方、自然環境保護への具体的な貢献の促進については、Hvenegaard, G. T. (1994) が、環境理念、自然環境への具体的、直接的な貢献、資源の内的価値をより強調し、エコツーリズムは、①環境への悪影響を伴う資源管理に対して、資金面で好ましいオルタナティブを提供できる、②ホストコミュニティの経済的、社会的、文化的状況を維持する、あるいは、改善することにより、地域支援への支持を得ることができる、③保護地域に対し、資金面で利益をもたらすことができる、④エコツーリストを教育し、提唱の精神を培う可能性をもつ。エコツーリズムの経験は、地域環境に関する意識、洞察、知識、理解、評価、参画によって、それを一層尊重することとなり、環境保護を促進させる。エコツーリズムは、エコツーリストが、野生生物及び環境保全団体への支援を行うがゆえに高いポテンシャルをもつ、の4点を挙げる。

さらにより具体的、実践的側面については、Valentine, P. S. (1993) が、持続可能なエコツーリズムの条件として、①コミュニティに対する、明確で持続可能かつ適切な利益、②ツーリストのデスティネーションの選択と、地域で保護された自然との間の明確なつながり、③環境を保護しながら地域住民とビジターに満足を与える、地域における適切な管理とスキル、の3点を指摘する。

以上のことから、地域振興の視点を基に、エコツーリ

ズムの領域に関して、次のような点を指摘することが可能である。

第一に、エコツーリズムの領域に関する議論においては、理念としての価値を重要視する立場と、具体的な定義の基に、自然環境保護、あるいは、ツーリズムの振興といった一定の目的のために利用する立場の両方を含んでおり、それらの関係をどのように考えるのかという点、第二に、地域全体の諸条件の中で、エコツーリズムというひとつのツーリズム形態自体の拡大、成長を目的とするのか、あるいは、地域における一定の目的を達成する上において、ツーリズムの範囲を越えた領域（例えば、教育や生活行動）を含めて、エコツーリズムにより一層の価値を見出すのかという点、の2点を明確にする必要性が生じることである。

地域開発に対する資源管理、自然環境保護の強化、地域におけるツーリズムの振興、あるいは、旅行商品としてのコンセプトの明確化、マーケティングの推進といった具体的、実践的な要請がある場合には、エコツーリズムが他の形態のツーリズムにはない具体的で固有の特性をもつ必要性が生じ、地域開発と環境保全との対立、地域経済へのインパクト、旅行商品としての「エコツーリズム」の成長といった局面において、先に指摘した2点の明確化が重要な役割を担うことになる。こうした段階においては、ツーリズムの目的、ツーリストの属性、活動内容等、ツーリズムの各形態に共通する要素を設定して、その有無や程度の強弱により定義を明確にし、それをふまえて、エコツーリズムの構成要素、具体的内容を明確にすることが有効となろう<sup>8)</sup>。

## 2. エコツーリズムにおける自然環境保護と経済的価値

自然環境保護と経済的価値との関係は、エコツーリズムを含むツーリズム全般において重要な検討課題であるが、特にエコツーリズムの場合、自然環境保護に敏感な地域が対象となるため、そうした課題がツーリズム自体のあり方に直接関わることになる。

したがって、地域振興との関連では、その関わりの具体的内容として、地域の諸条件に基づき、第一に、自然環境保護と経済的利益との両立を図る上で、ツーリズムの理念、あるいは、実施、推進体制や方法といった局面において、エコツーリズムが先導的な役割を果たすべきものと位置づけるのか、第二に、ツーリズムの実施、推進段階において、自然環境保護と経済的価値の両立を促す体制や方法を具体化する段階でエコツーリズムをとらえるべきなのか、第三に、エコツーリズムの経済効果に

焦点を置いて、効果を増大させていく中で、自然環境保護のための方法、環境への負荷の解決策を検討していくべきなのか、といった点を明確にする必要がある。

以上のような議論の基礎をなすのは、自然環境保護と経済的価値をもたらす開発との関係である。Cater, E. (1994) は、エコツーリズムの展開において、両者のトレードオフ関係から4つのシナリオを提示し、その中で、環境保全、改善と同時に所得増大を促すような両者のポジティブな関係をもつシナリオ (the win-win scenario) は、環境及びビジネス両面に関わる活動において、環境保全という点で合致している場合に実現されるとする。ただし、持続可能性との関連では、経済的、社会的、文化的側面を意思決定に取り込まなければならず、さらに、異なった利害間で対立が生じることとなり、そのため、環境と開発の一方、または、両方にマイナスの効果を及ぼすシナリオがあり得ることになる<sup>9)</sup>。

また、エコツーリズムの理念から実施、推進段階については、例えば、Wight, P. A. (1994) は、適切な管理に基づく自然環境保護と経済的価値との両立、補完、持続可能性の実現の重要性を示し、その場合の経済的利益として、①地域経済の多様性 (特に、農村地域、周辺地域、工業化されていない地域)、②長期的な経済的安定性、③エコツーリストによる高額の出費、長期滞在の傾向、④地域経済に利益をもたらす地域内の財、サービスへの需要、⑤インフラストラクチャーの整備、⑥外貨の増大、を指摘している。エコツーリズムの需要指向性に関する見解があるものの (例えば、Lillywhite, M. and Lillywhite, L. (1989) in Wight, P. A. (1994))、基本となるのは、エコツーリズムにおける供給側の戦略的・事前的な管理の重要性である。さらに、事業者については、商品開発や活動において、Wight, P. A. (1993) が指摘するような理念の導入、また、ツーリズム実施段階においては、事業者と関係する諸主体間の合意、パートナーシップ形成が重要な役割を担うことになる。

そうした場合の焦点となる事業者と環境保全に関わる主体とのパートナーシップの形成については、①環境保全、あるいは、地域開発を推進する主体に対するツアー料金の一部の寄付<sup>10)</sup>、②資源の価値に関する教育、③科学的活動の見学、あるいは、参画機会、④支援サービスや商品提供への地域の関わり、⑤文化活動、もしくは、それらと自然資源との関係についてのインタープリテーションへの地域の関わり、⑥責任ある旅行の理念実現に向けて、ツーリスト、事業者に対する規約の奨励、といった様々な形態をとる。(Wight, P. A. (1994))。

以上のような理念、それを実現するための実施・推進体制、方法が示唆される一方では、自然環境保護と経済的価値との両立に関して、否定的な方向を示す見解、報告がある。

第一は、理念や体制、方法の実現自体が現実の諸条件のもとでは困難であるとするものである。例えば、Valentine, P. S. (1993) は、小規模で村落に基礎を置くエコツーリズムの実現化方策及びその実践について、検討すべき多くの問題があること、その理由のひとつは、適切なツーリストを誘引し、期待した収入をもたらす適切なマーケティング戦略が困難であることを指摘している。その点で、エコツーリズムは、実際には、多くの人々に多額の経済的利益を生み出すことはおそらく不可能であろうという、経済的価値に関する否定的な見解を示唆している<sup>11)</sup>。

第二は、エコツーリズムの理念の基底には、社会や地域によって、理念が基づくべき自然に対する価値観の相違が存在することである。エコツーリズムが、目的的なツーリズムであり、人と自然との接し方についての行動理念を促すものであっても、自然に対する価値観が異なることによって、自然へのインパクトに対する認識の違いが生じ、問題とされることになる。また、自然への影響に問題が生じることは、自然に関する科学的知識に制約があること、また、その知識の伝達方法、人間行動への反映のさせ方にも関わっている (Gauthier, D. A. (1999))<sup>12)13)</sup>。

### 3. エコツーリズムの計画論・開発論

地域振興に向けての地域計画、地域開発という実践的側面においては、エコツーリズムの定義、ツーリズムの形態としてのとらえ方、具体的な推進方法について、ツーリズム全体の展開との関連で検討する必要がある。そのため、前項までの議論とは異なり、エコツーリズムの定義、とらえ方は、より広義で、地域限定的、もしくは広域的となる。

この点について、Nelson, J. G. (1994) は、エコツーリズムの一般的な定義を、特定の計画やマネジメントについて行うことは困難であり、したがって、行政、企業、地域住民において、エコツーリズムの考え方が、ツーリズムの発展に関して他の形態のツーリズムとの違いを出せるかどうか明確でないこと、また、エコツーリズムの考え方が環境への悪影響という点から産業を変化させていこうという見方には疑問があることを示し、計画、マネジメントの実践においては、マス・ツーリス

ムを含むツーリズム全体、ツーリズムのあらゆる形態における効果を扱う方法を見出すことが望まれるとしている。

ただし、地域住民、環境保護団体、行政、企業が、エコツーリズムの一般的な定義について、高度なレベルの合意に達したとしても、環境、文化への望ましくない影響を解決することにはならないという点に留意する必要がある。その根拠は、北米の国立公園において環境を重視する目標と対象を確立し、ゾーニングシステムと規制によって、ツーリズムとレクリエーションを制限してきたにもかかわらず、重大な影響を受けていることにある。その最大の理由は、個々には小規模でインパクトの弱いツーリズム開発ではあるが、それらの数十年にわたる累積的な影響である。こうした影響は、管理者、プランナー、専門家、市民によって認識されない場合が多く、それは、国立公園の外部においてばかりでなく、内部において、土地利用変化に対する体系的なモニタリング、評価が乏しいからであるとする (Nelson, J. G. (1994))。

さらに、計画、施策立案、推進において、エコツーリズムの意義、生態系全体への累積的影響が理解されたとしても、ツーリズム、それに関わる活動から得られる社会経済的な利益ほどの高い価値が置かれられない場合、また、地域住民の参画意向と観光客の余暇活動ニーズにずれがある場合 (神吉 (1996)) がある。したがって、より詳細で広範なモニタリング、評価が、あらゆる主体において生態系の理解を促すと同時に、どのような形態のツーリズム及びそれに関わる活動が、資源利用者及び地域住民にどの程度受け入れられるかについてのコミュニケーションを改善していくことが必要であることになる<sup>14)</sup>。

そのため、地域計画における意思決定プロセスとして、Nelson, J. G. (1994) は、7つの基本的なプロセスからなるシビックス・モデルを提唱し、それをふまえて、計画、管理手法として、①目標と対象の設定、②生態系と社会経済システムを理解できる研究、③効率への関心、④人材、⑤環境教育、⑥倫理面での規約、⑦モニタリング・評価手法、を示している<sup>15)</sup>。さらに、エコツーリズムがもつ優れた情報伝達機能と多様なリンク機能を発揮させることが、環境保全、地域振興に意義をもつという見解 (藤山・戸田 (1998)) をふまえると、自然環境保護に関わる各主体間のコミュニケーションと意思決定が、地域振興全体に対して効果を及ぼしていくことが重要と考えられる。

他方、エコツーリズムにおける広域的な地域のとらえ方については、Weaver, D. B. (1997) の例がある。ここでは、地域特性を考慮することにより、エコツーリズムのポテンシャルを実現するためのフレームワークとして、5つのゾーンを提示している。それは、①原生自然、②資源フロンティア、③農業フロンティア、④農業中心地域、⑤都市地域、である。そうしたフレームワークは、エコツーリズムが行われるより広範な空間を重視すること、保護地域だけでなく都市地域を含めること<sup>16)</sup>、域外だけでなく域内のエコツーリストを認識する点で、従来のエコツーリズムに関する議論とは異なるが、空間と市場両方の面でより有用なエコツーリズムが提示できるとする。

以上をふまえると、地域計画、地域開発という実践的側面においては、第一に、エコツーリズムは理念的な側面で有効性をもつが、具体的な地域における実践段階では、他の形態のツーリズムとの関係、ツーリズム全体としての効果を考慮した上で、エコツーリズムを企画立案し、推進する必要があること、第二に、そのためには、環境に対する長期的かつ詳細なモニタリングとその評価を行い、計画、開発に関わるあらゆる主体が生態系、地域資源に関する理解を深めるとともに、意思決定における柔軟なプロセスとコミュニケーションの質的向上を図ること、第三に、広域的観点から、地域特性に応じたツーリズム形態を明確にし、その中にエコツーリズムを位置づけること、第四に、その場合、地域特性に応じたエコツーリズムの意義を積極的に認め、地域外ばかりでなく、地域内のエコツーリストへの効果、自然環境保護に関わる具体的な実践活動を促す効果、持続可能性といった理念に基づき、ツーリズムを越えた領域への効果を視野に入れること、といった点を指摘できる。さらに、こうした点から、エコツーリズムがもつ広範な社会経済的有効性、ポテンシャルを、ツーリズムだけでなく、その関連領域を含めて、具体的な計画、開発において最大限活かすことが重要と考えられる。

### III 地域振興との関わりからみた エコツーリズムの考え方

#### 1. エコツーリズムにおける地域

エコツーリズムに関わる地域の考え方については、エコツーリズムをどのような局面でとらえるかに関わる。本稿では、地域振興の視点に基づき、エコツーリズムが目指す目標と領域の具体化、自然環境保護と経済的価値

とのバランス、地域計画、地域開発という実践的側面への適用という立場から、次の2点を示したい。

第一に、自然環境保護への貢献を意図するような狭義のエコツーリズムへの指向性が強い場合には、自然保護区域、もしくはそれに類する地域への限定性が強く、環境保全のための体制、方法の構築、環境へのネガティブなインパクトの解決、それをふまえたエコツーリズムのあり方といった点が重要となる。その際、自然保護区域の生態的特徴把握とその評価、環境保全、資源管理の手法・体制・計画、エコツーリズムを担う主体の属性及び役割、各主体間の相互関係、それらに基づくエコツーリズム推進の仕組み、エコツーリズムに伴う費用負担と経済的利益、エコツーリズム推進、環境保全のための制度的問題点、解決策等の諸点が具体化される必要がある。

その具体化のプロセスにおいて、対象地域として、エコツーリズムが推進される自然保護区域及びその周辺地域が焦点となり、地域資源、各推進主体、環境保全、資源管理に関わる体制・計画・制度は、自然環境保護、環境保全を強化するため、そうした地域をよりシステム化する方向へと作用し、その結果、地域限定的な推進主体の形成、資源管理計画・体制、ツーリズム及びそれに関連する諸活動に関するガイドライン、規制といったかたちで、エコツーリズム固有の仕組みとして具現化されることになる。

第二は、地域計画、様々な主体による地域開発を具体的に推進していく上で、エコツーリズムが一定の役割をもち、他の形態のツーリズムとの相互関係の中でエコツーリズムを展開していく場合には、多様な特性をもつ地域資源の価値、地域資源を含めた地域特性とその広域的位置づけ、ツーリズムにとって有効な地域特性と地域資源との関係(地域特性に適合した地域資源の活用等)、資源間及び地域間の連携、それらをふまえた各地域におけるツーリズム推進の具体化、その中でのエコツーリズムのあり方といった点が重要となる。

この場合、エコツーリズムの具体的内容(活動内容、推進主体等)については、地域特性及び地域資源との関係が基礎となり、それが地域内において、また、広域的にどのような特性、役割をもつのかに依存することとなる。それは、各地域におけるエコツーリズムの具体的内容を明確にする際に、自然環境保護に直接関わる活動が中心となるのか、あるいは、よりアクティブなレクリエーション活動を指向するののかといったことが、①活動内容が地域特性(生活・社会的側面、経済的側面)にどのように位置づけられているのか、また、②地域資源が地

域内外に対してどのような価値をもつのか、という2つの関係からとらえられることを意味する。

以下では、上述した第一の点については「III-2」で、第二の点については「III-3」で、各々の考え方を示すことにする。

## 2. エコツーリズムと活動・主体

自然環境保護、環境保全という目的指向性が強いエコツーリズムにおいては、エコツーリズムに直接関わる具体的な活動、それを担う主体を中心に、エコツーリズムの構成要素間のつながりが地域においてより緊密化され、強化されることを伴う。つまり、「II-1」で述べたエコツーリズムの目標との関係に基づく、環境面での目標のウエイトが高まることにより、その実現に必要な条件、課題の具体化、明確化がより促されることとなり、その結果、地域における資源管理、環境管理、ツーリズム・マネジメント(ガイドライン、インタープリテーションの提供、教育等)、マーケティング、推進主体形成が、地域においてより密接なつながりをもって行われる必要性が高まる。

活動、主体のつながりに着目すると、ツーリストは、ツーリズムに関するニーズ、マーケティングに基づく選択、意思決定により、供給側によって与えられるツーリズム・マネジメントに対する同意、理解、教育等の活動を経て、エコツーリストとして地域を訪問する。エコツーリストは、地域及び地域資源に関する固有の知識、関心をもち、インタープリテーションのもとに地域資源と接する。この段階で、エコツーリストと野生生物、環境というツーリズム対象との直接的な関係が発生し、地域における体験、観察、学習、保養等の具体的な活動として具現化する。こうした活動は、地域全体としての活動の一要素を構成すると同時に、一次的にはエコツーリスト、次いで域外のエコツーリズムに関連する様々な主体において評価され、価値づけられることになる。

他方、エコツーリズムに関わる活動は、地域における自然環境保護、環境保全に対し、理念、経済、教育等の面で効果をもたらすと同時に、その活動に伴う環境への影響を発生させる。地域においては、そうした影響に対し評価を行い、地域を構成する地域住民、専門家、行政、環境保全に関わる団体といった各主体が資源管理、環境管理を行うことにより、ネガティブな影響を排除し、自然環境保護、環境保全を実践する。

以上のようなエコツーリズムを構成する一連の活動及びそのつながりにおいて、地域内外において地域資源に

対する価値づけが高く、自然環境保護、環境保全に対する効果への指向性が強いほど、資源管理、環境管理、ツーリズム・マネジメントの必要性が高まり、上記一連の活動間及びそれを担う各主体間のつながりは緊密化され、強化されていく。他方、エコツーリズムに関わる活動と地域における他の活動との整合性、各主体間における地域資源に対する異なった価値づけ、異なった効果への期待の存在、資源管理、環境管理の手法・体制の適合性といった問題が存在する場合には、そうしたつながりにおける複雑さ、多様性がより拡大すると考えられ、各々の局面において、エコツーリズム固有の問題として各主体が解決しなければならない。その際、合意形成、意思決定、実践におけるプライオリティ、主体性の問題は、地域におけるきわめて重要な課題である。

### 3. エコツーリズムと地域特性・地域資源

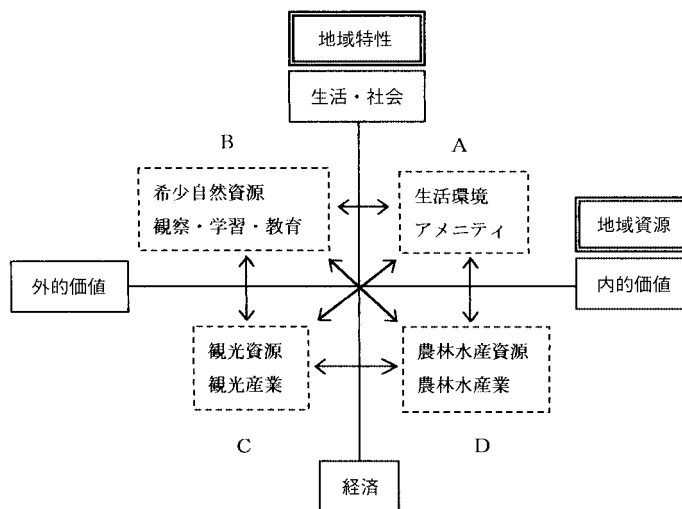
エコツーリズムと地域振興との関わりでは、地域がもつ多面的な特性に基づき、第一に、エコツーリズムにおける諸活動は、地域全体を構成する要素の一部として、生活・社会や経済といった広範な側面の中に位置づけられ、一定の役割を担っていること、第二に、エコツーリズムが依存する地域資源の価値は、エコツーリズムの直接の対象となる地域資源が存在する地域内に視点を限定することなく、地域外を含めた視点に基づく必要があること、を重視する必要がある。

以上については、地域特性と地域資源との関係として第3図に示している。図中では、縦軸は、地域特性として、生活・社会的側面に関わるのか、あるいは、経済

的側面に関わるのかを意味し、横軸は、地域資源の価値が、地域内に対するもの（地域住民にとって価値があり、生活の維持、向上に不可欠である）なのか、あるいは、地域外に対するもの（地域外の人に対して価値があり、観光客として地域へ誘引する）なのかを意味しており、それら2つの軸による4つの領域（A、B、C、D）に地域資源、活動を例示している。

エコツーリズムに関する地域資源及び活動は、すべての領域に関わっているが、特に、地域資源が、希少自然資源、観光資源として両立し、生活・社会、経済両面で存立可能な場合は、内的価値を減じない限り、エコツーリズムは地域振興にとって有効となる。他方、希少自然資源が観光資源となり（BからCへシフトする）、生活・社会的側面から乖離するとともに、内的価値が減じられる（縦軸が右へシフトする）場合には、資源・環境管理、ツーリズム・マネジメントが必要となり、地域資源を生活・社会的側面に組み込むと同時に、内的価値への悪影響を排除しなければならない。この場合、狭義のエコツーリズムが、自然環境保護、環境保全に直接貢献する点で重要な役割を果たす。なお、領域間関係、連携（図中矢印の意味内容）については、例えば、AとBは、生活環境としての自然資源が希少資源として価値をもつ（希少な自然生態）、AとCは、地域の生活環境がそれ自体観光資源となっている、AとDは、生産資源としての農林水産資源が生活環境として重要な役割を果たす、BとDは、希少自然資源が農林水産資源としての役割をもつ（特産品等）、CとDは、農林水産資源が観光資源としての役割を果たす（観光農業等）、等の事

第3図 地域特性と地域資源との関係





例が該当する。

こうした図式について、いまひとつ重要な点は、単一の地域においてすべての領域が共存する条件に乏しい地域の存在である。例えば、外的価値をもつ観光資源や希少自然資源に恵まれない地域等がそれに該当する。その際、他地域の資源との連携、補完により、地域内の資源をより効果的に活用する可能性がある場合には、広域連携による資源活用の方法、仕組みを具体化、実践することによって、地域振興に有効な役割を果たすことが可能となる。

#### IV 地域振興におけるエコツーリズムの展開 ——田辺市の事例を基に——

本項においては、以上での地域振興を視点に据えたエコツーリズムという考え方を基に、自然保護活動を直接視野に入れることにより、自然保護活動の経緯と活動内容との関連で、エコツーリズムがもたらす効果、ツーリズムとしての展開方向をとらえてみたい。

そのため、第一に、自然保護活動自体の意義や評価といった点を扱うのではなく、地域における自然保護活動が具体的にどのようなかたちでツーリズムと関わり、地域振興にどのような効果を与えるのか、第二に、自然保護活動の一環としてのエコツーリズムを含めて、地域におけるツーリズム全体としてどのように展開していくのか、どのような方向性に可能性を見出せるのか、といった点について、田辺市の事例を基に検討を進める。

#### 1. 自然保護活動の展開

事例として取り上げる田辺市天神崎（概要については第1表参照）は、1987年我が国で最初に自然環境保全法人の認定を受けたナショナルトラスト運動の地としてよく知られている<sup>17)</sup>。

1970年代半ばの別荘地開発に対する自然保護活動に端を発し、地域住民の自発的な活動が原動力となって、土地の買い取りが行われてきた。買い取りというかたちになったのは、天神崎は、田辺南部海岸県立自然公園の一部ではあるが、丘陵地は最も規制の緩い第三種特別地域であり、土地所有者が規制に従って造成しようとする場合、行政側においては自然保護のために造成を不許可にすることができなかつたためである<sup>18)</sup>。自然保護団体である(財)天神崎の自然を大切にする会、田辺市による土地の買い取りは、1976年の第1次に始まり、1999年の第11次に及んでいる<sup>19)</sup>。

活動においては、①天神崎の自然保護は教育運動につながるという効果がある、②市民が多数の力で土地所有者を押し切るのではなく、市民も犠牲を分け合い、適当な代価を支払うことにより、土地所有者の協力を得ることを基本方針として貫いた。その後、学術調査を実施するとともに、1975年以降自然観察教室を開催することにより、学術的、教育的価値に対する認識を深めていった。自然観察教室への参加者は、小学生が多く、学校単位・クラス単位での参加であり、また、中学生では、クラブ活動としての参加もある。地域では、田辺市周辺からの参加が多かったが、和歌山県、近畿一円からのまとまった参加者も増えてきた。

天神崎の自然環境の価値に関する認識は、(財)天神

第1表 天神崎の概要

地域概要	① 所在地：田辺市元町字立戸・貝良 ② 田辺南部海岸県立自然公園天神崎地域（元島を除く）（海岸林：約20ha、岩礁域：約13ha、合計：約33ha）
自然の特色	① 天神崎地域は、市街地に近接しているにもかかわらず豊かな自然が残されており、磯釣り、磯あそび、ダイビング、散策や遠足等多くの人々の自然利用の場となっている。 ② 天神崎は、海と潮間帯岩礁と森とが連携して豊富な生物相を形成している。 ③ 天神崎の岩礁は、平坦で広く、満潮時にちょうど潮をかぶり、干潮時には13haが露出する。多くの岩の割れ目は、水路や潮だまりともなり、変化に富んだ生息場所の中で潮間帯生物の種類、個体数ともに多い。また、安全にこれらの生物を観察できる。 ④ 天神崎の海岸段丘は、広い岩礁が海食崖の崩落を防ぎ、よく保護されている。この段丘の上に発達した雨水による土砂の磯へ、さらに海への直接の流出を防いでいる。また、森林の雨水は植物の分解物や、地中のミネラルを海に栄養塩として供給している。 ⑤ 天神崎の森林は、過去薪炭材として伐採が繰り返され、若い二次林の状態が維持されてきた。近來の松枯れの後、ウバメガシを主体とする常緑広葉樹が優占する照葉樹林としての形態をとりはじめている。 ⑥ 田辺湾の湾口の天神崎は、湾外から黒潮の、湾奥から富栄養の影響を受け、海産生物の種類数・個体数ともに豊富である。

資料：(財)天神崎の自然を大切にする会「天神崎の自然を大切にする運動二十周年通史」、1995年

第2表 自然保護に関わる活動

年	自然観察	教育・研修・視察等	イベント等
1987	自然観察教室(地1)	市民グループ(地1)、子供グループ(地1)	シンポジウム(1)
1988	自然観察教室(地3)	教育関係団体(全1、近1)、学習グループ(地1)、子供グループ(地1)	シンポジウム(1)
1989	自然観察教室(地2)	自然保護団体(近2)、青少年団体(近1)、学習グループ(近1)	シンポジウム(1)
1990	自然観察教室(地2)	大学生(近1、外1)、高校生(地2)、中学生(地2)、小学生(地2)、高校教員(近1)、中学校教員(近2)、自然保護団体(近1)、教育関係団体(全1)、地域団体(外1)、ボランティア関係団体(全1)、学習グループ(近2)、行政(外1、近1)	
1991	自然観察教室(地1)、小学生(地1)、生協(地1)	大学生(外1、地1)、高校生(地3)、中学生(地2)、小学生(地1)、市民団体(地1、近1)、教育関係団体(地4)、青少年団体(近1)、企業関係団体(近1)、子供グループ(地5)、企業(地1)、行政(外1)	
1992	自然観察教室(地1)	大学生(外1)、高校生(地2)、小学生(地1、近1)、教育関係団体(近2)、自然保護団体(近1、不1、全1)、生協(地2、近1)、老人グループ(地1)、市民グループ(近1、地2)、企業関係団体(近1)、企業(近1)、行政(外1)、その他団体(不1、近1、全1)	イベント(子供の写生・展覧会2)
1993	自然観察教室(地2)、小学校(地1)、教育関係団体(地1)、行政主催海辺の教室(地1)	大学生(近1)、高校生(地1)、中学生(外1)、小学生(地2)、中学校教員(近1)、教育関係団体(地1)、自然保護団体(全1)、ボランティア団体(地1)、身障者団体(全1)、生協(近1)、市民グループ(外1)、環境保護学習グループ(不1)	子供の写生会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1994	自然観察教室(地2)、教育関係団体(地1)、企業主催自然観察教室(地1)	高校生(近1、外1)、小学校教員(地1)、教育関係団体(地1)、自然保護団体(外1)、福祉関係団体(近1)、地域団体(近2)、労働者団体(近1)、生協(近1、地1)、研究機関(近1)、市民グループ(地1)、その他団体(不1)	子供の写生・展覧会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1995	自然観察教室(地2)、教育関係団体(地1)	大学生(外1)、小学生(地4、近1)、小学校教員(近1)、自然保護団体(外1)、研究グループ(不1)、企業(不1)、生協(地1、近1)、市民グループ(地1)、学習グループ(不1)、行政(近1、外1)	子供の写生会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1996	自然観察教室(地2)、企業主催自然観察会(不1)	高校生(地1)、中学生(地1)、小学生(地1、近1)、大学教員(地1)、小学校教員(近1)、大学研究室(近1)、教育関係団体(地1)、自然保護団体(近2、外2)、婦人団体(地1)、地域団体(地1)、労働者団体(地1)、生協(地1)、学習グループ(地1)、市民グループ(地2)、行政(外2)	子供の写生会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1997	自然観察会(地1)、教育関係団体主催自然観察(地1)、スポーツ団体主催自然観察(地1)、生協主催自然観察(地1)、行政主催自然観察会(地1)	高校生(近1、地4)、中学生(近1)、小学生(近1、地1)、高校・大学教員(近1)、教育関係団体(近2、地1、不1)、市民団体(近1)、自然保護団体(近2、不1)、福祉関係団体(地1)、地域団体(近1)、スポーツ団体(地1)、市民グループ(外1)、企業関係団体(近1)、観光関係団体(近1)、子供グループ(地1)、企業(不1)、行政(地1)	子供の写生会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1998	自然観察教室(地1)、高校生野外観察(地1)、中学生自然観察指導(地1)、地域団体主催自然観察、生協主催自然観察(地1)、自然観察ボランティア養成(地1)	高校生(地2)、中学生(地2、外1)、小学生(地1、近1)、養護学校(地1)、大学教員(外2)、教育関係団体(近1)、市民団体(地1)、自然保護団体(近2)、地域団体(地1)、青少年団体(地1)、企業関係グループ(近1)、学習グループ(近1、不1)	子供の写生会(1)、子供の絵の展覧会(1)
1999	自然観察教室(地2)、青少年団体自然観察指導(近1)、スポーツ団体自然観察指導(全1)	高校生(外1、地1)、中学生(近1、地1)、小学生(近1、地3)、専門学校生(地1)、市民団体(外1、近1)、自然保護団体(近2、全2)、労働者団体(全1)、学習会(近1)、市民グループ(近1)、行政(近1、外2、地1)、その他団体(不1)	南紀熊野体験博「天神崎シースクール・カヌー体験」、「ラジオウォーク南方を訪ねて in 天神崎」、「天神崎シースクール・ヨット体験」(1)、子供の写生会(1)

注) 上表は、(財)天神崎の自然を大切にする会が関わった自然保護に関わる活動を示したものである。各活動、もしくは活動主体の( )内の数値は、当該年の実施回数を示す。また、( )内の数値以外の表記は、「地」(地元):田辺市及び和歌山県内、「近」:近畿、「外」:近畿以外の国内、「国」:全国、「不」:地域が特定できない・不明、であり、いずれも組織・機関・団体等活動主体の所在地、あるいは、それらの構成員や参加者の地域的な範囲を示す。

資料:「天神崎通信第1~12号」(財)天神崎の自然を大切にする会発行、1986~2000年)を基に作成(なお、活動、もしくは活動主体の分類、集計は、筆者による。)

崎の自然を大切にすることが市議会に提出した「天神崎の自然を保存する必要性とその理由」(1975年)において指摘した、①天神崎は田辺市民の心に深いつながりをもつ特別な自然であること、②自然保護憲章の精神に照らし重要であること、③教育的観点から重視され、全国的に注目を集めてきている自然であること、の3点に見ることができる。

さらに、近年においては、第2表に示すように、自然保護に関わる活動は、自然観察をはじめ、教育・研修等を目的とする活動として多様化しており、また、活動主体の地域は、田辺市、和歌山県内を中心に、近畿、全国へと広域化している。

以上のような自然保護活動の経緯、活動内容の変化について、「III-3」で示した地域特性と地域資源との関係を基に見ると、ナショナルトラストという自然保護活動の展開の中で、天神崎の自然環境の価値は、内的価値に依存したのから、外的価値を含むものへと拡大していること、生活・社会的側面において、身近な生活環境、自然観察の場としての位置づけから、地域内外における希少自然環境としての位置づけが増していること、当初の学習・教育的活動からイベント等を含むものへと活動内容の多様化を伴っていること、といった点を示すことができる。

## 2. 地域づくりと広域ツーリズムへの展開

田辺市天神崎の事例を基にすると、自然保護活動に基づくエコツーリズムに関わる活動は、地域振興との関連から、次の2つの点が重要であると考えられる。

第一は、自然保護活動の蓄積が、地域振興へのインパクトが生じた場合に、それをきっかけに、自然保護を含めたより広い地域づくり、特に、地域住民主体の地域づくりに対してより高い効果をもたらす可能性があることである<sup>20)</sup>。

自然保護活動の活発化により、地域の知名度が上昇し、地域資源の外的価値の増大、活動の広域化が進むにつれて、活動内容の質的向上、学習・教育効果が高まることとなり、地域内外からの地域振興へのインパクト(イベント、地域づくり活動等)をより効果的にするための条件が培われることとなる。その際、自然環境保護への指向性が強いほど、活動に関わる主体間、活動間のつながりは緊密な連携を保つことが必要となり、効果を高めるための主体形成がより実践的となり、強化されることになると考えられる。さらに、天神崎の事例のように、地域住民主体の性格が強い場合は、主体形成や意思

決定において地域の主体性がより強いかたちでインパクトを活かすことが可能であり、さらにそれは、自然環境保護を主体にした活動を基に、レクリエーション等の活動を含めたツーリズムへと、地域の側からより多様化、広域化していくことにつながる。

第二は、エコツーリズムと他の形態のツーリズムとの連携により、広域ツーリズムの一環として、地域外との関係で地域振興への効果が高まる可能性があることである。

田辺市の場合、天神崎がナショナルトラスト運動の地であると同時に、紀伊半島における広域ツーリズムの中で重要な位置にある。集客性という点では、隣接する白浜町が大きな役割を果たすが<sup>21)</sup>、田辺市は、熊野古道・紀伊路、中辺路、大辺路ルートの結節点、アクセスポイントにあり、隣接する集客型ツーリズムと熊野古道というネットワーク型ツーリズムとの連携により、自然観察や自然体験、保養等の自然環境に依存する活動を基礎に、文化、歴史、スポーツといった領域にツーリズムの幅を広げながら、例えば、広域イベントにおける拠点的機能の発揮等のかたちで、地域振興への効果が高まることになる。

以上のように、エコツーリズムと地域振興との関わりにおいて、①自然保護活動が促す地域住民主体の地域づくりへの効果、それがもたらすツーリズムの多様化、広域化への展開、②広域ツーリズムの一環としての機能強化が促す地域振興への効果、の2点の重要性を示唆することができる。

## V おわりに

本稿においては、地域振興に視点を据えて、エコツーリズムの目標・形態、自然環境保護と経済的利益との関係、エコツーリズムの計画論・開発論といった点からエコツーリズムの特性を検討し、エコツーリズムと地域振興との関わりに関する考え方、地域特性と地域資源に基づくエコツーリズムの位置づけに関する図式を提示した。それをふまえて、田辺市の事例を基にしながら、地域振興に与えるエコツーリズムの効果を高める可能性について、自然保護活動から地域住民主体の地域づくりへの効果、ツーリズムの多様化、広域化への展開、また、広域ツーリズムの一環としての効果という点を示唆した。

以上をふまえて、今後は、エコツーリズムが、自然に依存し、自然環境保護に貢献するツーリズムとして、地域振興において担う社会経済的な意義を地域特性に基づ

いて具体的に検討すること、地域内及び地域外との関係の中での活動主体、活動内容のあり方、推進体制・方法を明確にすること、それらが地域振興をもたらす過程を実証的に明らかにすること等を課題として検討を進めた。

#### [付記]

本稿の骨子は、経済地理学会関西支部例会（2000年12月2日）において発表を行った。

#### 注

- 1) **Wearing, S. and Neil, J. (1999)** は、エコツーリズムの定義、特徴、政策等に関する最近の包括的研究において、ツーリズムの持続可能性との関連を重視し、持続可能な開発を実践するエコツーリズムは、人間と環境との相互関係への新しいアプローチを提示する戦略であるとする。
- 2) エコツーリズムに関する論点としては、自然保護、経済発展、非政府組織と政府の役割、ホストコミュニティ、観光産業、観光客とといったとらえ方がある (**Wild, C. (1994)**)。本稿では、個々の論点に共通する立場として、地域における様々な条件の中で、推進すべきエコツーリズムの実行可能性 (**feasibility**) をいかに高めるかという点につながる議論を重視している。
- 3) 本稿で言う地域振興とは、生活の質的向上、地域経済の活性化、地域文化、地域環境の保全、創造を促すことにより、地域全体としての厚生 (**welfare**) を高めることを意味する。
- 4) マス・ツーリズムが引き起こした諸問題を是正し、地域社会の振興に寄与する方向にそのあり方を模索することが重要であり (**石原 (2000)**)、したがって、エコツーリズムに着目すれば、マス・ツーリズム、オルタナティブ・ツーリズムとの関係の中で、地域における具体的なあり方を検討することが必要となる。
- 5) **西村 (1998)** は、エコツーリズムの役割として、マス・ツーリズムとの関係の中で、観光産業全体における既存の手法の改善を可能とし、持続可能な観光の実現に寄与することを示唆する。これを地域振興との関連で見れば、産業としてのエコツーリズムと、地域がもつ条件へのその適合性、それをふまえたツーリズムのあり方に関する地域的意思決定との間で、様々な局面においてエコツーリズムの具体的な特性を検討していく必要性につながる。
- 6) ①の定義については、「相対的に乱されていない自然地域を訪れる旅行のひとつであり、地域における風景、野生生物ばかりでなく、現存する文化的特性を尊び、学び、楽しむという特定の目的をもつ。」 (**Ceballos-Lascurain, H. (1991, 1996)**)、②の定義については、「文化、環境の自然史を理解することを目的とする、自然地域への目的的な旅行であり、生態系に変化を与えないようにする一方、地域住民に対して有益な自然資源の保全を行う経済的機会を創り出す。」 (**The Ecotourism Society (1991) in Hvenegaard, G. T. (1994)**)、我が国におけるエコツーリズム推進協議会 (**1999**)、(社)日本旅行業協会 (**1998**) の定義等がある。また、③の定義については、「エコツーリズムは啓発を促す自然体験旅行であり、生態系の保全に寄与する一方、ホストコミュニティの保全に高い価値を置く。」 (**Canadian Environmental Advisory Council (CEAC) in Wight, P. A. (1994)**)、「エコツーリズムは、①相対的に乱されていない自然地域に依存する、②自然を損なわず、また、質を低下させず、生態学的に持続可能である、③利用される自然地域の継続的な保護と管理に直接貢献する、④適切な管理制度に基づく。」 (**Valentine, P. S. (1993)**)、我が国における(財)日本自然保護協会の定義 (**1994**) 等がある。また、一般に、環境保全に関わる組織や団体は、自然に基礎を置く、持続可能であるように管理されている、環境保護に支援を行う、あるいは、環境に関する教育が行われるツーリズムだけをエコツーリズムとする傾向がある (**Buckley, R. (1994)**)。
- 7) 先の「II-1-(1)」におけるエコツーリズムの包括的な定義では、明示的に扱われないものについても、ツーリズム形態としての視点が含まれている場合がある (**Scace, R. C. (1999)**)。
- 8) 具体的な構成要素の設定に基づくエコツーリズムの検討については、例えば、**Bottrill, C. G. and Pearce, D. G. (1995)** は、エコツーリスト、オペレーター、資源管理に関する指標に基づき、ブリテイッシュコロンビア州における22の自然に基礎を置くツーリズムを分類した結果、エコツーリズムに該当するものはわずか5つにすぎず、多くが保護区域に関する基準を満たさないことを明らかにしている。他方、エコツーリズムの理念・概念、その基調となる哲学的・社会的背景から、ガイドライン、エコツアー等の具体的な側面、将来展望にアプローチする視点がある (**塚本 (1996 a, 1999, 2000)**)。
- 9) **Cater, E. (1994)** は、第三世界のエコツーリズムに関して、持続可能な開発のためには、政府が、①市場への介入、②計画と推進における国際的統合、③地域との関わりとの促進、を行う必要があることを指摘する。
- 10) 我が国においては、1990年代に入り、旅行代金の一部を環境保護に寄付するツアーを含むエコツアーが増大したが (**小方 (2000)**)、それは、環境問題への配慮、エコツアーのあり方に対する懸念につながっている。
- 11) **Steele, P. (1995)** は、経済分析に基づき、エコツ

- ーリズムの急速な成長は、多くの場合、非持続可能であり、①自然地域への自由なアクセスが経済、環境両面での非効率をもたらすこと、②それは土地所有者に関わること、③土地所有者は自由なアクセスを制限する政策手段を選択する必要があること、④その際、価格と量(ツーリスト数等)との間の政策的選択を伴うこと、を指摘する。また、ビジネス面については、例えば、**Burton, R. (1997)** は、①持続可能性が最も高いエコツーリズムの市場はきわめて小規模である、あるいは(及び)、理論的に想定される以上にはるかに価格意識が強いこと、②事業者は、市場規模が小さいために、効率的なマーケティングができないことによって適切な地域へアクセスできない場合には、商品の質を下げるか、ビジネスから撤退しなければならないこと、③持続可能なエコツーリズムを提供する事業者は、観光地の循環プロセスの一部分をなすため、環境面で持続可能な商品を提供する上で、そうしたプロセスをもたらす商業的、経済的諸力から商品を保護することにはならないこと、を指摘する。他方、エコツーリズムのビジネス化に関して、環境問題をビジネス・チャンスとする観光ビジネスのひとつの可能性としてとらえる視点がある(**東(1999)**)。
- 12) 地域の主産業を観光とするか他産業とするかという点には、観光事業の恩恵を一部の人がだけ享受しているという意識と余暇活動への関心度の影響が大きい(**高橋・十代田・加藤(1998)**)ということから、自然環境の価値認識については、地域の産業構造、ツーリズムを含む諸活動に対する各主体の意識、関わり方の問題が背景にあることに留意する必要がある。
- 13) **秋山(1996)** は、過疎化した山村の価値をエコツーリズムという面から再評価することにより、既存の地域振興策の見直しにつながることで、地域振興の効果を雇用や所得等の経済指標によって評価することに限界があることを指摘する。他方、地域住民が、エコツーリズムを外部の枠組みとして受けとめ、そこから生活を組み立て、地域を再評価し、再構築していくという視点(**菊地(1999 ab, 2000)**)、また、交流人口、利用者の側からエコツーリズムの可能性をとらえる視点(**小松原(1998)**)がある。
- 14) 地域資源の保全と地域活性化の視点から、どのようなエコツアーを受け入れていくかについて、地域主体で明確な方針をもつことが必要である(**吉田(1999)**)ため、各主体間のコミュニケーションの上に立った地域における総合的なエコツーリズム推進体制の構築が不可欠である。
- 15) **Blangy, S. and Nielsen, T. (1993)** は、ツアーオペレーターと環境保全団体に対する調査に基づき、エコツーリズムのインパクトを最小化する政策について、①コミュニケーション手段、②補完的なガイドライン、③地域ごとに特定された商品のコード、④標準的、公式的、汎用的なガイドライン、⑤観光産業との協力、⑥ガイドラインがマネジメントにおいて不可欠であるという認識、⑦地元への利益の最大化、を挙げる。
- 16) 都市における環境思考型、自然思考型ツーリズムを「都市型エコツーリズム」とする考え方が有る(塚本(1996 b))。
- 17) ナショナルトラスト運動は、組織形態に基づいて、①住民が中心になっているもの、②自治体を中心になっているもの、③当初から住民と自治体が協力して進めているもの、に大別され、田辺市天神崎の運動は①のタイプとされている(**木原(1998)**)。木原(1998)は、②のタイプには北海道斜里町、③のタイプには長野県南木曾町があり、国内外のナショナルトラストに共通する特質のひとつとして、運動の進め方にそうした「多様性」があることを指摘し、その他の特質として、住民の「自発性」、運動がもつ「教育的効果」、環境保存における「先見性」、運動における「協力性」を示している。こうした点は、同様に、自然環境保護、環境保全への指向性が強いエコツーリズムの推進がもつ、あるいは、もつべき重要な特質、役割と言える。
- 18) 本項における田辺市天神崎に関する記述が基づく資料、データは、(財)天神崎の自然を大切にす会(1995)及び「天神崎通信第1~12号」(同財団発行、1986~2000年)による。
- 19) 買い取った面積は、1976年第1次(2,390 m<sup>2</sup>)、1978年第2次(6,176 m<sup>2</sup>)、1984年第3次(6,366 m<sup>2</sup>)、1985年第4次(25,969 m<sup>2</sup>)、1988年第5次(3,752.32 m<sup>2</sup>)、1993年第6次(4,115.67 m<sup>2</sup>)、1994年第7次(431.26 m<sup>2</sup>)、第8次(2,010.18 m<sup>2</sup>)、第9次(7,526 m<sup>2</sup>)、1995年第10次(4,321.21 m<sup>2</sup>)、1998・1999年第11次(2,870 m<sup>2</sup>)となっている。
- 20) 1999年、和歌山県において南紀熊野体験博が開催されたが、田辺市においては、その効果を活かすため、天神崎で実施されたイベントをきっかけに民間グループが南紀黒潮体験塾を結成し、釣り、ダイビング、マリナーボート、観光漁業等の体験イベントを継続させている。南紀黒潮体験塾の他に、観光ボランティアガイドや市民主体のまちづくりを行う団体が南紀熊野体験博をきっかけに地域づくりに取り組んでいる。また、これらの団体を含めた地域づくりを行う団体間及びそれらと田辺市との連携を図ることにより、市民の主体的な地域づくりを促進している(田辺市資料による)。
- 21) 田辺市の観光客総数は、1998年71.9万人(うち宿泊客18.8万人)、1999年138.1万人(うち宿泊客18.9万人)、白浜町の観光客数は、1998年348.5万人(うち宿泊客206.9万人)、1999年328.0万人(うち宿泊客198.6万人)である。田辺市における

1998～1999年の伸びは、南紀熊野体験博によるものであるが、観光客の圧倒的多数は日帰りである。他方、白浜町の観光客は、宿泊滞在型が主体であ

り、滞在のタイプ、観光客数において田辺市とは対照的である(田辺市資料による)。

#### 参考文献

- 秋山道雄「環境学習施設の立地と余暇行動の類型—エコ・ツーリズムの展開によせて—」(所収 脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興—グリーンツーリズム 解説と事例—』古今書院、1996年、156-165頁)
- 東 徹「持続可能な観光と企業対応」(所収 森本正夫監修・塚本圭一・東徹編著『持続可能な観光と地域発展へのアプローチ』泉文堂、1999年、109-121頁)
- 石原照敏「マス・ツーリズムとオルタナティブ・ツーリズム」(所収 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編『新しい観光と地域社会』古今書院、2000年、1-4頁)
- エコツーリズム推進協議会『エコツーリズムの世紀へ』、1999年、18-34頁
- 小方昌勝『国際観光とエコツーリズム』文理閣、2000年、176-181頁
- 神吉紀世子「グリーン・ツーリズムの取り組みと都市市民の余暇活動ニーズの対応に関する研究—京都府美山町における入込み客と地元住民の意向比較—」、『1996年度第31回日本都市計画学会学術研究論文集』、1996年、109-114頁
- 菊地直樹「「地域づくり」の装置としてのエコ・ツーリズム—高知県大方町砂浜美術館の実践から—」、『観光研究』10(2)、1999年 a、19-28頁
- 菊地直樹「エコ・ツーリズムの分析視角に向けて—エコ・ツーリズムにおける「地域住民」と「自然」の検討を通して—」、『環境社会学研究』5、1999年 b、136-150頁
- 菊地直樹「エコ・ツーリズムと地域社会—地域への再評価の装置としての可能性—」(所収 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編『新しい観光と地域社会』古今書院、2000年、95-106頁)
- 木原啓吉『ナショナル・トラスト新版』三省堂、1998年
- 小松原尚「交流人口の拡大とエコ・ツーリズム—釧路湿原地域における観光客流動を事例として—」、『北見大学論集』39、1998年、59-73頁
- (財)天神崎の自然を大切にす会『天神崎の自然を大切にす運動二十周年通史』、1995年
- (財)日本自然保護協会『(財)日本自然保護協会資料集第35号 NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』、1994年、5-6頁
- (社)日本旅行業協会『JATA エコツーリズムハンドブック エコツーリズム実践のためのガイド』、1998年、16-19頁
- 高橋慎也・十代田朗・加藤純子「グリーンツーリズム型観光開発が過疎地域に及ぼす影響に関する実証的研究—新潟県高柳町を例として—」、『1998年度第33回日本都市計画学会学術研究論文集』、1998年、691-696頁
- 塚本圭一「エコ・ツーリズムについて」、『北見大学論集』35、1996年 a、41-55頁
- 塚本圭一「都市型エコ・ツーリズムについての研究」、『北見大学論集』36、1996年 b、17-49頁
- 塚本圭一「エコツーリズム」(所収 森本正夫監修・塚本圭一・東徹編著『持続可能な観光と地域発展へのアプローチ』泉文堂、1999年、73-83頁)
- 塚本圭一「エコ・ツーリズムについて II」、『北見大学論集』44、2000年、45-68頁
- 西村幸子「エコツーリズム—持続可能な観光に向けての模索—」(所収 (財)アジア太平洋観光交流センター『観光に関する学術研究論文 第3回観光振興又は観光開発に対する提言』、1998年、37-54頁)
- 藤山 浩・戸田常一「持続可能な地域発展とエコツーリズム」、『国際協力研究誌』4(1)、1998年、109-126頁
- 吉田 肇「沖縄モニターツアーによる地域発案型エコツーリズムの可能性に関する調査研究」、『1999年度第34回日本都市計画学会学術研究論文集』、1999年、349-354頁
- Blangy, S. and Nielsen, T. "Ecotourism and minimum impact policy", *Annals of Tourism Research* 20(2), 1993, pp. 357-360
- Bottrill, C. G. and Pearce, D. G. "Ecotourism: towards a key elements approach to operationalising the concept", *Journal of Sustainable Tourism* 3(1), 1995, pp. 45-54
- Buckley, R. "A framework for ecotourism", *Annals of Tourism Research* 21(3), 1994, pp. 661-665
- Burton, R. "The sustainability of ecotourism", in Stabler, M. J. (ed.) *Tourism and sustainability: principles to practice*, Cab International, 1997, pp. 357-374
- Cater, E. "Ecotourism in the third world—problems and prospects for sustainability—" in Cater, E. and Lowman, G. (eds.) *Ecotourism: a sustainable option?*, John Wiley & Sons, 1994, pp. 69-86
- Cater, E. "Environmental contradictions in sustainable tourism", *Geographical Journal* 161(1), 1995, pp. 21-28
- Ceballos-Lascurian, H. "Tourism, ecotourism, and protected areas", in Kusler, J. A. (compiler), *Ecotourism and re-*

- source conservation. *Selected papers from the 1st (April 17–19, 1989, Merida, Mexico) and 2nd (Nov. 27–Dec. 2, 1990, Miami Beach, FL) International symposium on ecotourism and resource conservation*, 1991, pp. 24–30
- Ceballos–Lascurian, H. *Tourism, ecotourism, and protected areas*, The World Conservation Union, 1996, pp. 19–29
- Eagles, P. F. J. and Higgins, B. R. “Ecotourism market and industry structure” in Lindberg, K., Wood, M. E. and Engeldrum, D. (eds.) *Ecotourism: a guide for planners and managers Vol. 2*, The Ecotourism Society, 1998, pp. 11–43
- Gauthier, D. A. “Sustainable development, ecotourism, wildlife and ecosystems”, in Nelson, J. G., Butler, R. and Wall, G. (eds.) *Tourism and sustainable development: a civic approach*, Department of Geography Publication Series No. 52 and Heritage Resources Centre Joint Publication No. 2, University of Waterloo, 1999, pp. 113–134
- Hvenegaard, G. T. “Ecotourism: a status report and conceptual framework”, *Journal of Tourism Studies* 5(2), 1994, pp. 24–35
- Lindberg, K. and Enriquez, J. *An analysis of ecotourism’s economic contribution to conservation and development in Belize*, Washington, D. C.: World Wildlife Fund, 1994
- Nelson, J. G. “The spread of ecotourism: some planning implications”, *Environmental Conservation* 21(3), 1994, pp. 248–255
- Scace, R. C. “An ecotourism perspective” in Nelson, J. G., Butler, R. and Wall, G. (eds.) *Tourism and sustainable development: a civic approach*, Department of Geography Publication Series No. 52 and Heritage Resources Centre Joint Publication No. 2, University of Waterloo, 1999, pp. 82–110
- Steele, P. “Ecotourism: an economic analysis”, *Journal of Sustainable Tourism* 3(1), 1995, pp. 29–44
- Valentine, P. S. “Ecotourism and nature conservation. A definition with some recent developments in Micronesia”, *Tourism Management* 14(2), 1993, pp. 107–115
- Wearing, S. and Neil, J. *Ecotourism: impacts, potentials and possibilities*, Butterworth–Heinemann, 1999, pp. 130–137
- Weaver, D. B. “A regional framework for planning ecotourism in Saskatchewan”, *Canadian Geographer* 41(3), 1997, pp. 281–293
- Wight, P. A. “Sustainable ecotourism: balancing economic, environmental and social goals within an ethical framework”, *Journal of Tourism Studies* 4(2), 1993, pp. 54–66
- Wight, P. A. “Environmentally responsible marketing of tourism”, in Cater, E. and Lowman, G. (eds.) *Ecotourism: a sustainable option?*, John Wiley & Sons, 1994, pp. 39–55
- Wild, C. “Issues in ecotourism”, in Cooper, C. P. and Lockwood, A. (eds.) *Progress in tourism, recreation and hospitality management Vol. 6*, John Wiley & Sons, 1994, pp. 12–21